

村上克尚
河崎秋子
瀧瀬尚純
保井啓志

本多弘之

吉田真樹
三沢亜紀
石原正晴

田村晃徳
菊池弘宣

anjalie

あんじやり



特集テーマ

〈動物〉から 問われる〈人間〉

2024

44

〈動物〉から 問われる〈人間〉

今号の特集は、二〇二三年の春に出た一本の記事から始まりました。それは、鳥インフルエンザの流行によって、前年の秋から約半年にわたって一七七一万羽の鶏が「殺処分」されたことを報じるものでした。この問題は、「卵の価格高騰」、「養鶏業の大規模化と集約化に問題」などと、もっぱら経済、ニュースとして報じられていました。しかし、鶏の大量の死は、私たちが「殺す」立場にあるという事実を、すなわち私たちの「暴力性」を突きつけるものであり、〈動物〉を通して自分自身と改めて向き合い、〈人間〉について再考することを迫るものでした。本特集はそんな問題意識から出発しています。

今日、動物保護やヴィーガニズムが高い関心を集めていますが、近年盛んになりつつある〈動物〉をめぐる議論では、そうした問題にとどまらず、〈人間〉と〈動物〉という私たちがごく自然に用いている区分が、実は〈動物〉に対する暴力を正当化してきたのではないか、ということが問われています。なぜなら、〈動物〉という概念には、理性をもたず、そのため〈人間〉によって管理・利用されるべき存在であり、ひいては「殺してもよい存在」だという含意があるからです。問題はそれ



（浅野竹二「黄色い鳥と赤い鳥」1971年作、自由版画。府中市美術館所蔵。原作品は多色刷り）

だけではありません。特定の人たちを〈動物〉、つまり劣等の生きものと見なし、その尊厳を奪い、存在を抹消することまでもが正当化されることもあります。ホロコーストや、現に今ガザで起きている出来事など、今日なお根強く残る弱者に対する様々な暴力・差別の事実がそれを示しています。

私たちは〈動物〉と〈人間〉の関係を、どう捉えるべきでしょうか。〈動物〉として〈人間〉に踏みつけられてきた存在の苦しみや痛みにも、どのようにして触れることができるでしょうか。また、このような問題に関する多様な考えや思いを共有するには、どのような表現がありうるのでしょうか。いずれも、多様な視点を踏まえつつ、考え続けるべき問いでしょう。本特集では、文学の世界に表れた〈動物〉に対する〈人間〉の暴力性や共生の可能性、畜産という営みにおける〈動物〉と飼育者との一筋縄ではない関係、〈動物〉を「畜生」とみなしてきた仏教に「ペット葬」という現代のトレンドが突きつける問い、そして人を〈動物〉と見なして支配と暴力の対象とする今日のパレスチナ問題まで、〈動物〉をめぐる最先端で思索を重ねてきた方々にご執筆いただきました。そのアプローチも主張も表現も多様であり、読者の受け止めもさまざまであるでしょう。しかしそれは本特集が扱う問題の複雑さ、幅と奥行きを反映でもあります。本特集を通して、〈動物〉から問われる〈人間〉について思索を深めるための手がかりを、読者とともに尋ねていきたいと考えています。

（親鸞仏教センター 徳田安津樹）

交差点

- 田村晃徳 ・ 30
「心のある人」に
- 菊池弘宣 ・ 31
「なめとこ山の熊」と「獵師」に教えられる実存的課題

Essais

- 吉田真樹 ・ 20
光源氏の隠遁
- 三沢亜紀 ・ 22
「満蒙開拓」の被告席―学び合いの場から考える―
- 石原正晴 ・ 28
新宿沖

連載

- 本多弘之 ・ 18
衆生の生命を受けるとは

特集

- 村上克尚 ・ 2
動物という迷い路
- 河崎秋子 ・ 6
人間と動物を分かつ壁の向こう側
- 瀧瀬尚純 ・ 10
動物を吊う禅僧たち
- 保井啓志 ・ 14
イスラエルにおいて戦争に動員される人間／動物の境界



動物という迷い路

村上 克尚

MURAKAMI
Katsunao

大江健三郎のデビュー作「奇妙な仕事」（『大江健三郎全小説』第一巻、講談社、二〇一八年、初出『東京大学新聞』一九五七年五月）は、三人の大学生が実験用に飼われた一五〇匹の犬を撲殺するアルバイトに就く話だ。

犬たちは吠えなかったが僕が入って行く
と一斉にこちらを見た。一五〇匹の犬に
一斉に見つめられるのは奇妙な感じだった。
三百の脂色の曇りのある犬の眼に映ってい
る三百の僕の小さいイマージュ、と僕は考
えた。それは小さい身震いを僕に感じさ
せた。

犬たちの謎めいたまなざしと、それらに感応して「僕」に起こる、「小さい身震い」を伴う自己同一性の解体の体験。この犬の殺害の現場に読者として立ち会った私は、これ以降、長い迷い路に足を踏み入れた。それは人間と動物の関係をどのように想像すればよいか、という課題だとひとまずは言える。個々の文学作品による触発のなかで、動物をめぐる私自身の想像力がどのように変容してきたかを以下では素描してみたい。

大江の初期小説には、動物が頻出する。このことの意味を考えていたとき、南アフリカ出身のノーベル賞作家、J・M・クッツェー『動物

のいのち』（森祐希子・尾関周二訳、大月書店二〇〇三年）に収められた、「哲学者と動物」、「詩人と動物」という二篇の小説に出会った。そこでは、エリザベス・コストロという架空の女性作家が、動物の立場に共感することの大切さを訴え、ポーランドのトレブリンカ強制収容所に運搬されるユダヤ人と、食肉工場に運搬される家畜とを、あえて重ねた上で、次のように聴衆に語りかけていた。

恐ろしいのは、殺す側が犠牲者の立場に立って考えることを拒絶したし、他の人もみな同じだったという点なのです。彼らには『がたがたと通りすぎていく家畜車のなかにいるのは、やつらなんだ』と言いました。『その家畜車のなかにいるのが自分だったら、どうだろう？』とは言いませんでした。『あの家畜車のなかにいるのは自分だ』とは言わなかったのです。『きょう焼かれているのは死んだ者たちに違いない。いやな匂いを撒き散らし、灰になって私のキャベツの上に降ってくる』と言いました。『自分が焼かれているのだったら、どうだろう？』とは言いませんでした。『私は焼かれている。私は灰になって降っている』とも言いませんでした。

ここでコストロが強調するのは、「やつら」＝「動物」という境界区分のもとに、強制収容所に勤務するドイツ人も、周囲に住むポーランド人も、そこで何が起きているかを知りつつも、殺される「動物」に心を閉ざしたということだ。そして、それは、現在私たちが、郊外の食肉工場や企業の実験室で動物たちに何が起きているかを知りつつも、無知を装っていることと同じではないか、とコストロは訴える。

この二〇〇〇年代のクツツエーの小説を通じて、大江の初期小説に新たな光が当てられた気がした。「奇妙な仕事」の犬は、何らかの隠喩として理解されるべきではない。そこには、「動物に対しては何をしても良い」という傲慢な思い込みのもとで振るわれる暴力が描かれている。実際、大江は、初期小説について、「サルトルと強制収容所の記録の二つの指標を手がかりに」したとも語っている（『年譜』『新鋭文学叢書一二 大江健三郎集』筑摩書房、一九六〇年）。人間の動物に対する暴力は、人間の人間に対する暴力と地続きなのである。

ただし、現在から振り返れば、「奇妙な仕事」をナチスの強制収容所との関連のみで捉えることに問題があったことも確かだ。二〇二三年、イスラエルのヨアヴ・ガラント国防相は、ガザの人びとに対して、「我々は人間動物（human animals）と戦っているのだ」と発言した。かつ

て「動物」の地位に落とされた者が、今度は別の他者を「動物」と定め、自分たちのジェノサイドを正当化することの恐ろしさ。ナチスの強制収容所のみを二〇世紀を代表する暴力のように扱うことは、別の場所で犠牲になっている者たちへの暴力を隠蔽することになるだろう。

実際、「奇妙な仕事」では、「人間」と「動物」の境界線はどこまでもあいまいである。作中の「私大生」は、「爪の間に犬の血がこびりついていてとれないんだ。それに石鹸でどんなにこすっても犬の臭いがとれない」と恐惶をきたし、「僕は赤犬に腿を噛まれて狂犬病の菌に感染したかもしれないと怯える。「人間」と「動物」は常に逆転し得る。だからこそ、学生たちは、あたかも殺す側にいることだけが唯一の「人間」の証明であるかのように、犬たちを撲殺し続けるのかもしれない。

大江健三郎は、人間と動物の境界線が政治学的なものであることを熟知し、その境界線のもとで、自身が容易に暴力の加害者になったり被害者になったりする可能性に、心底から怯えることのできた稀有な作家だった。

*

大江健三郎の小説を基点として、武田泰淳、小島信夫という戦後作家まで対象を広げると、私は、人間と動物の境界線の揺らぎという主題が戦後文学に広く共有されていたこ

とを明らかにした（この点は、拙著『動物の
声、他者の声——日本戦後文学の倫理』新曜社、
二〇一七年を参照されたい）。

しかし、動物という迷い路を抜けた気は全く
しなかった。そこには、二〇一一年の東日本大
震災の記憶があった。あの巨大な複合災害にお
いて、少なくとも原発事故の責任は完全に人間
にあった。被災地に取り残された動物たちのま
なざしをいまだに忘れられない者は多いだろう。
あのまなざしは、人間と動物の境界線を問い直
すだけではなく、もっと大きな変革を要求して
いるのではないかと思えてならなかった。

そのときに出会ったのが、青森県出身の作
家・木村友祐の「聖地Cs」（『聖地Cs』新潮社、
二〇一四年、初出『新潮』二〇一四年五月号）だっ
た。「聖地Cs」は、福島県双葉郡浪江町の「希望
の牧場・ふくしま」をモデルとしている。この
牧場では、放射能汚染の警戒区域にいる家畜は
全て殺処分するようにとの政府の命令に従わず、
三〇〇頭以上の牛を生かすことを選んだ。

女性主人公の「わたし」は、一年前に派遣社
員を辞めている。失職中の彼女は、映像で見た「希
望の砦」という牧場が忘れられず、夫といさか
いを起こしながらも、ひとり東京を離れて、そ
の牧場を訪れる。

「わたし」が計画を話したとき、夫は「お前

はまだあと十年は生めるからだなんだから、わ
ざわざリスクにさらすことないだろう」、「もっ
たいないじゃない。その間はまだ、女としての
機能があるんだから」と言い放つ。夫の言葉は、
子どもを生めない女性は女性ではない、という
メッセージとして「わたし」に響く。それは、
社会にとっての生産性によって、女性の価値、
人間の価値を決定することにほかならない。

夫の言葉は、「わたし」に、かえって「希望の砦」
の牛たちに会いに行く決意を固めさせる。なぜ
ならば、「希望の砦」の牛たちもまた、放射能に
汚染され、乳牛としても、肉牛としても「使い
みち」がなくなり、生産性の埒外に置かれてい
るからだ。「わたし」はただ、そのような牛たち
の生を見つめる。

仙道さんが以前、自分の本だけ取材記事
のなかで言っていたことを思い出します。
ここにいう出荷できない牛たちはベットで
はないし動物園の動物でもない。じゃあ一
体なんなんだ、と。——じゃあ一体あなたた
ちは。わたしもそう思っただけで見つめるので
す。彼らはただ静かに目を伏せて、足下のわ
ずかな草を鼻先を動かして探しているの
でした。

「わたし」は、牧場の外からは廃材のように蔑
まれる牛たちを見つめながら、人間もまた「人材」
という言葉に典型的なように、この社会では「資
源」として扱われ、使い捨てられることを思う。
このとき、「わたし」には、資本主義が要請する
生産性の原理に抗い、自分のいのちの尊厳を守
るといふ、牛たちとの共闘のヴィジョンが開か
れてくる。

ここには、被曝した牛たちの生を媒体としつ
つ、女性や派遣社員といった、この社会で声を
奪われた者たちの声——「LGBTのカップルの
ために税金を使うことに賛同が得られるもので
しょうか。彼ら彼女らは子供を作らない、つま
り「生産性」がないのです」という二〇一八年
の杉田水脈議員の発言を重ねれば、セクシユア
ル・マイノリティもそこに含まれるだろう——
が重なり合っていくさまが表現されている。フェ
ミニズム、クイア、反資本主義といった潮流が、
動物への倫理と連帯することで、この社会の大
きな変革を可能にするのではないかという予感
を、「聖地Cs」は与えてくれた。

*

しかし、それでもなお、被災地の動物たちの
まなざしを想起するたびに、人間社会の内部の
変革で十分なのかという問いが私のなかで響い
た。動物たちとの共闘というヴィジョンは間違っ

ていない。しかし、問題は、その先の共生をいかに想像するかにあるのではないか。確かに動物たちは、人間の巨大な暴力によつて虐げられている。しかし、動物たちを「暴力の犠牲者」という枠組みに当てはめてしまうことは、人間の側の別様の思いがりを示すことになってしまわないだろうか。動物の声を聴くとはどのような営為なのか。それは、動物たちを単に「犠牲者」や「共闘者」としてまとめるのではなく、それぞれの固有の声を聴き取り、その多様性のなかに自分を位置づける技術を学んでいくということではないだろうか。

このように考えるにいたったひとつの契機は、哲学者の鶴飼哲が東日本震災の直後に発表した論稿だった。そこで鶴飼は、アイヌの詩人である宇梶静江が書いた「大地よ／重たかったか／痛かったか／あなたについて／もつと深く気づいて、敬つて／その重さや痛さを／知るすべを／持つべきであった」という詩を取り上げ、「宇梶氏の詩は、災害そのものとう向き合うのか」という根本のところ、今の列島社会で自明視されているある種のヒューマニズムの枠を超えています」とコメントしていた（「符牒とタブーに抗して——アナクローニ・過誤・不可能な正義」『現代思想』二〇一一年七月臨時増刊号）。そこには、大地という無生物についても、ほかのものたちとの絡み合いのなかで固有の力を発揮す

るアクターとして捉え、それらすべてに敬意を払いながら生きていこうとするアイヌの世界観が示されていた。

このアイヌの文化に強い関心を抱いていた作家のひとり、津島佑子だった。太宰治の次女として生まれ、二〇一六年に六八歳で亡くなった津島の文学には、いま様々な角度からの関心が寄せられている。

津島の文学にはいくつもの転機があるが、とりわけ一九八五年に幼い長男を亡くした体験は大きいものだった。「真昼へ」（津島佑子コレクション）悲しみについて『人文書院、二〇一七年、初出『新潮』一九八八年一月号）では、長男を喪失した悲しみと、アイヌから学んだ世界観とが相互に絡み合っていくさまが描き出されている。以下は、息子を亡くした母親の語りである。

あなたを知るのと同時に、あなたのまわりにいるいろいろな人が現われ続けた。そうそう、それにたくさんの動物も、その動物たちが住む神社や公園、土手もね。（中略）あなたが関わった一連の人たちによって支えられ、息吹も与えられ続けているひとつの有機体があなただの実体なんだ、と定義したら、おかしいかしら。でも、こういう風に定義すれば、あなたは物理的にも生き続けていることになる。

母親の言う「一連の人たち」に動物たちや自然を加えても良いだろう。人間は世界とともに存在しており、その人間が失われたとしても世界のほうが記憶している。世界に生きるそれぞれの存在者が、それぞれの固有の仕方、喪われた人間について語り始めるというのである。私はここに、アイヌの世界観と共鳴する、人間と動物と自然が互いに敬意を払いながら共生していくための重要な想像力が表現されていると感じる。いまは、この津島文学の枠組みから、人間と動物の関係を捉え直したいと考えている。

文学は、「この私」から出発し、自身に超越を禁じながら、人間と、動物と、世界とを内側から描いていく。そのような文学に導かれながら、文学研究者である私もまた迷い路のなかを歩き続けている。ジャック・デリダ『動物を追う、ゆえに私は（動物で）ある』（鶴飼哲訳、ちくま学芸文庫、二〇二三年）ではないが、動物のまなざしに捕らわれることで始まったその迷い路に、いまだ終わりは見えない。

（むらかみ かつなお・東京大学大学院総合文化研究科准教授）

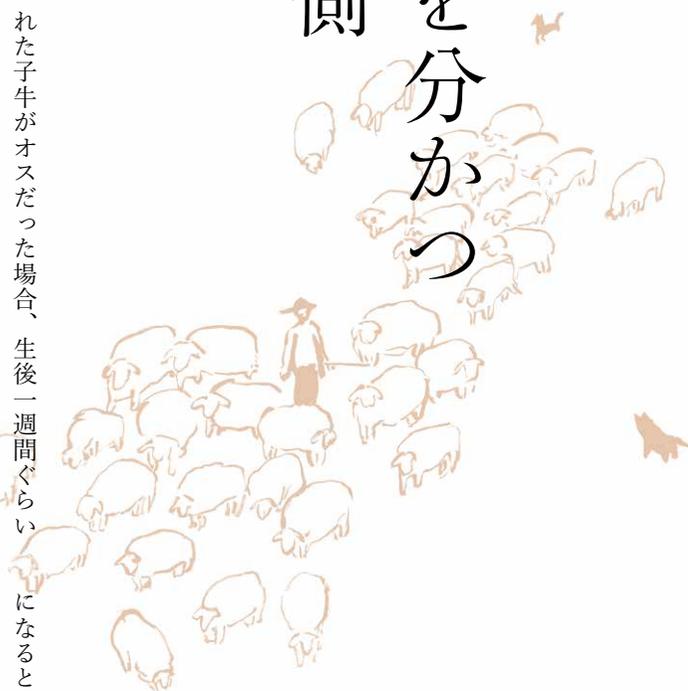
著書に『動物の声、他者の声——日本戦後文学の倫理』（新曜社、二〇一七年）など。

人間と動物を分かつ 壁の向こう側

五年前まで、私は北海道東部にある実家で、
牧場作業員をしながら羊飼いをしていた。

日本では耳慣れない職業のせいか、なぜ羊飼
いになったのか、と人からよく聞かれる。イン
タビューなどでは『学生の時に食べた羊の肉が
美味しかったから』などと答えていたが（いや
それも間違いなく動機のひとつなのだが）、実の
ところはそれだけでもない。

私は牛飼いのもとで育ち、牛の分娩にはよく
立ち会ったものの、牛が死んで肉になる過程は
あまりよく知らなかった。日本の酪農では生ま



れた子牛がオスだった場合、生後一週間ぐらい
で家畜商に引き取られていき、やがて専門の牧
場で育てられた後、食肉になる。残ったメスの
子牛は性成熟を迎えれば人工授精で子牛を生み、
牛乳を出す。私の実家の場合は五〜六産もすれ
ばそのメス牛も例外なく食肉となる運命だ。た
だし、ほとんどの酪農家は家畜商に引き渡すか
家畜市場に出荷するのみで、自分が育てた牛が
肉になる過程を見ることはまずない。

そのため、子どもの頃の私は、酪農が命を扱
う仕事だと感じてはいたが、目の前の乳牛⇨肉

河崎
秋子

KAWASAKI
Akiko

になるという認識はいささか薄かったように思
う。だからこそ、成人して人生において自分の
やるべきことを考えた時、『自分が食べるもの
命から目を逸らしたくない』と思ったのだ。

まず狩猟を学びたいと考えたが、二十数年前、
今よりもエゾシカの食害や熊による事故が少な
かった当時、年若い女が猟銃を手にするハード
ルはまだ高く、それで生計を立てることは現実
的ではなかった。そこで、偶然知った羊飼いと
いう仕事に興味を持つに至ったのだ。

羊飼いは生まれた子羊を、繁殖に用いるメス

を除き、全て成獣となる前にラム肉として出荷することが多い。乳牛の場合とは違って、生まれさせてから肉にするまで、全てのプロセスを管理する。これに私は自分が向かい合うべきものの正解を見た直感したのだ。それが思い込みであつても構わない。私は大学卒業後にニュージーランド(NZ)に渡り、縁を得て知り合った羊飼いの牧場に住み込みで働くことになった。

さて、国や地域、世代、生まれ育った環境によって、個々人の動物に対する価値観は異なる。当たり前のことだ。

しかし実際に海を越えてよその文化圏に単身で乗り込んだところ、技術の違いと同時に、飼育している人、またそれ以外の一般の人も含め、動物への考え方がかなりの部分で違うことに驚かされることになった。実家の牧場では毎日が忙しく、私を含む四人の子どもたちは小学生にもなると毎日牛の世話を手伝うのが日常だった。ゆえに、家畜と接すること、分娩や出荷、予定の病死など生と死の現場に立ち会うことに自分は慣れているつもりでいた。それだけに、驚きは大きくなったのかもしれない。

実家の牧場では子牛が生まれたら速やかに隔離して人工哺乳により育てた。母牛を泌乳に専念させて、より効率的に牛乳を得るためだ。

しかしNZの羊飼いは、可能な限り母羊に子

羊の哺乳と世話をさせ、離乳の時が来るまで母子共に過ごさせる。人間が手間と時間とコストをかけて子羊を育てることはない。このため、いかに母子の間に強固な絆を作ってやるか、が羊飼いの腕の見せどころとなる。

母羊が難産のあまり子を産んだことを忘れそうになれば、出たばかりの胎盤に子羊の全身をすりつけて『これはお前が産んだんだよ』と匂いを確認させる。それでも子だと認識しない場合は、狭い柵などで母子を囲い、その外側に牧羊犬を繋いでおく。母羊は犬を警戒し、その隙に子羊は必死で乳首に食らいついて乳にありつくという塩梅だ。母羊に犬への敵対心を向けさせることで、子羊への庇護欲や母性を引き出す効果もある。

それでも中には、母羊にどうしても受け入れてもらえない子羊や、死産などで子を失った母親が出てくる。こうした組み合わせをなんとか義理の親子として結びつける方法のひとつとして、死んだ子羊の活用があった。

死んでしまった子羊の体がまだ分娩直後で羊水で濡れていれば、義子となる子羊の全身をすりつけて匂いを移し、母羊に元の我が子と誤認させる。それが難しい状態であれば、死んだ子羊の皮を剥ぐ。四肢の先・首回りにうまくナイフを入れれば、子羊の皮はまるで小型犬用の洋服のように筒状になる。それを、義子にセーター

のように着せて、母羊に実の子だと認識させるのだ。

我が子の皮を着た義子を母羊が受け入れ、授乳をしてくれれば大成功。ちゃんと母子関係が築かれれば、数日後、乾いた皮を切って外しても問題なく母子の愛情は継続する。要は、死体の有効活用だ。そして私にとってはいささかシヨクなやり方だった。日本では聞いたことがなかったうえ、死んだ子羊の皮を利用する技術に非常に驚いた。

私はキリスト教圏文化にもあまり詳しくはなかったが、『羊の皮を被った狼』という表現は、なるほど『羊の皮を剥ぐ』『羊の皮を何か(羊もしくは羊に類する穏やかなもの)に被せる』という、二つの行為が日常的にあったからこそ作り出されたのかもしれない、と理解した。他にも、善良なる羊の群れ(信徒)を管理し導く存在としての羊飼いの(指導者)の関係性など、古くからある生業としての羊飼いと宗教との関係性は切っても切り離せない。日本にはない畜産のシステマチックさ、そして羊飼いと職業とキリスト教が同じ土から生えていると学んだ修行期間でもあった。

ところで、NZで標準的な数百頭、場合によっては数千頭の羊の群れを移動させる時、牧羊犬の存在は不可欠だった。羊飼いの命令に従順で、

人間と共に働くことに喜びを見出しつつ、かつ羊を傷つけない牧羊犬を複数管理することは、羊飼いの大事な技術のひとつだ。

羊飼いは牧羊犬を家畜と見なす。日々よく調子を確認し、怪我や病気から守り、良い働きをすれば褒めるが、けっして甘やかしたりはしない。エサは羊の骨付き肉の欠片が一日に一つか二つ。もちろん犬はもつと食べたがるが、太らせば動きが鈍くなり、また、性格も怠惰になる。腹側の肋骨が二本ほど浮いて見える状態がベスト、と私は教えられた。かなりやせ型だ。

そして必要があつて飼育する以上は、しっかりとした躰を施さなくてはならなかった。羊飼いの指示を忠実に守り、羊の群れを適切にコントロールする牧羊犬の仕事ぶりは見ていて安定感がある。しかし、このように躰られた犬でさえ、犬である限り羊に噛みつきたい衝動を有しているものだ。それを躰によつてうまく抑えつ、人間にとつて都合よく利用しているのが牧羊犬なのだ（よつて、年をとつて躰によつて抑えられていた本能が前面に出てくると、その犬は引退、ということになる）。

その一方で、羊飼いはベットとしても犬を飼う。私が世話になっていた牧場では、ベットとして飼われていたフォックステリアが愛嬌たっぷりに仕事に同行し、可愛がられていた。もち

ろん仕事の邪魔はしない、羊を追いかけない、等の躰はされていたが、それはあくまで最低限のもので、牧羊犬に課せられるような厳しい試験はない。外の小屋で生活する牧羊犬に対し、ペット犬は当然のように人間の家に出入りし、カウチソファで憩う主人の膝の上に乗る、人間のベッドに潜り込んで眠るのだ。

同じ犬という動物であつても、しつかり線引きをしてそれぞれ大事に扱う。だからこそ牧羊犬たちもペット犬も、『働く』『愛される』というそれぞれの役割を過不足なく果たしていた。

話題は変わるが、動物と人間が関わることに主題になっている小説は、そこに愛が発生することが前提であることが多い。例えばベットとの出会いと別れについて。あるいは、野生動物と人間との戦いが軸の物語であつても、そこに描かれるのは野生との相克、そしてそこに存在するかどうか分からない愛に似たものだ。それは裏を返せば、読者（＝動物に関する物語を求めて本の表紙を開いた人）の求めるものが、動物と人間の間にある愛だということだ。

NZの羊飼いの、ペット犬への愛は分かりやすい。しかし、牧羊犬への愛はというと、なんとも伝えづらいものがある。

いや、牧羊犬だけでなく、畜産を生業とする

者が、子を産ませ／乳を搾り／最終的には肉として貨幣を得ることの中で、どれだけ家畜に愛を注いでいるのか、一般の人にはなかなか分かってもらいづらい。それどころか、食肉を消費すること、生産すること自体に疑問を持つ立場の人からは、畜産という経済行動そのものの『人間性』を疑う、非難めいた声さえ聞こえてくる。

しかし、そういった主張の人にこそ、もし耳を貸して頂けるのであればお伝えしたい。畜産者は家畜に対して、家畜に対してなりの愛情の注ぎ方をしている。人間の赤ん坊を寝かせられるようなベッドは用意しない。愛称をつけて呼ぶようなこともまずしない。死んでも個別の墓を作るようなこともない（馬頭観音像や獣魂碑は作つて祈る）。

しかしながら、畜産者は家畜の健康を保つよう常に注意を払う。子をなるべく安全に産ませ、また、利のあるうちはその種を決して絶たせはしない。水と餌を絶対に確保し、感染症を含む外敵から守り続ける。それが家畜を大事にするやり方なのだ。

単なる金の元だと思ふのであれば、円安や価格の下落で全ての畜産農家はすぐに職替えを考へるだろうから、こんな手間のかかる産業はすぐに廃れるはずだ。しかし実際はそんなことはない。家畜に愛着がなければ、家畜感染症で家

畜を淘汰しなければならぬ時、真っ先に電卓を弾くだろう。しかし実際には埋められていく死体の山を前にして、経済的損失分の何倍もの悲しみを抱くのだ。

私が羊飼いをしていた頃、辺境で野生動物の息吹を感じ続け、日々家畜を相手にする仕事は、常に人間というものの奇異さを感じさせるものであったように思う。我々ホモサピエンスという生き物は、あまりに他の生物と違う。ほとんど不可抗力の勢いで地球の資源（畜産を含め）を消費する存在でありながら、気持ちの面では野生動物の絶滅を惜しみ、個体の死を悼み、動物とともにいることを癒しとすら感じる。しかも、ほとんどの生物からは同質の愛を返してもらえないのに、だ。

例えば怪我をした希少野生動物が人里に姿をあらわしたとして。人間があらゆる手を尽くしてその個体を治療し、餌をやり、野生に戻しても生きていけると判断して山に放つとしよう。現場の多くの人間は、その動物が人間に感謝の念を抱いていないことを理解している。けっして治療され給餌された経験をもとに人間に近寄ってくれるな、とごく現実的なことを祈りさえする。

しかし、例えばドキュメンタリーあるいは小説や映画などの創作物として脚色を施すとき。

〈動物〉から問われる〈人間〉

制作側は野生動物と人間との間に愛という軸を必ず置きたくなる。そういうものがあると、信じたくなる。それゆえの創作とさえいえる。本来、生き物は同種間、すなわち人間同士で愛し合っていればいいにもかかわらず、だ。異性間、同性間、性愛、親愛、情愛。幸いなことに現代では様々な愛の形が（以前よりは）許容されやすくなっている。それでは足りないのが人間の面白いところであり、言い換えれば宿命でもある。人間間の愛だけでは足りずに動物を愛したがり、あわよくば時に動物の側からも愛が返されていると幻視したがる行為は、ひどく傲岸でさえある。

人間の本質は大きく変わらない割に、ここ十年ばかりで多様性という言葉はずいぶん広く認知され共有され、あらゆる発言、先鋭的な思索においても、多様性というある種のお守りを持つようになるってきた。喜ばしいことだ。公共の福祉に反しない限りでの人の考えの表明の自由、そして価値観の共有の自由は歩みの力強さを増している。

そしてその多様性というのは、もちろん動物に対する個々の考え方にもあらわれている。動物福祉、あるいはSDGs、またあるいはポリテイカルコレクトネスに反しない限り、思考は自由だ。車の前に親子連れの熊が飛び出してきた車両を破壊するという事態ひとつにしても、

『危険だ駆除すべきだ』『そもそも熊の生息地に人間があとから入り込んだのだ』『親子連れの熊は頑張っている』等々。様々な意見が入り乱れる。現地の状況に応じた最適解ともいえる解決策は必ず存在する。しかしそれ以外の、『それはそれとしてあなたはこの件についてどう思うか』については、三つ四つの選択肢ではとても足りなくなってきた。

野生動物。害獣。ペット。家畜を含む経済動物。そして人間。それぞれのあわいに立つ隔壁は高くもなれば時になぎ倒されることもある。毛のない皮膚と柔い爪しかない人間は相対的にかなり弱い。隔壁の向こうを慮れるのは人間のみでもある。エゴと思ひ込みと仮想の愛とのほさまをふらふら迷いながら、それでも考えることをやめられない。人間の弱さと傲岸さは、けれどひとつの武器でもある。

（かわさき あきこ・小説家）

『ともぐい』（新潮社、二〇二三年）で第一七〇回直木賞受賞。ほかに『絞め殺しの樹』（小学館、二〇二二年、小学館文庫、二〇二四年）など。

動物を弔う禅僧たち

瀧瀬 尚純

TAKISE
Shōjun



一、はじめに

現代社会において、犬や猫に代表される様々な動物は、人間が単に飼育するという「ペット」的存在ではなくなり、大切な家族の一員となっている。人生の伴侶となった動物たちとの永遠の別れに及び、その別離の辛さから立ち直れない、いわゆる「ペットロス」と呼ばれる現象が社会問題として取り上げられることもしばしばである。

近年、家族同然に生活したペットとの別れに際する弔いやその後の供養に関するニーズが急速に拡大してきた。宗派を問わず寺院においては檀信徒の要請などにより供養塔が建立されている。加えて民間業者によるペット墓事業も盛んに行われ、慈しんだペットとの別れに当たり、宗教的儀式や供養を行うことが広く社会に浸透

してきたといえる。

とは言うものの、宗教法人の経営によるペットの葬儀や供養塔は、非課税の宗教活動になるのか、それとも課税対象となる収益事業に当たるかが司法の場に問われたケースもある。平成二十（二〇〇八）年、最高裁判所で収益事業に当たる場合があるとの司法判断が下った一方で、平成二十四（二〇一二）年には真逆の判決が下される^{※1}など、ペット供養の法的な位置づけは一定していない。

そもそも、仏教における動物は、六道の一つ、畜生道に存在すると位置づけられている。畜生道とは、人の生前の悪業により、死後に生まれ変わる動物の世界をいう。この動物たちの世界では弱肉強食を常とし、お互いに殺し合い、安住を得ることはない。また、人により食用や課

役のため、蓄養される生き物でもあるから、「畜生」と呼ばれるのである。仏教では、これら苦しみの多い畜生道に堕ちるのは、先にも述べたとおり、我々人間が前世に積んだ悪業の結果と定義されている。このため、仏教各派の宗門内部においてはペット供養について、そのニーズの高さや重要性は承知しながらも、様々に在り方が議論されている途上といえるのではなからうか。筆者の所属する臨済宗妙心寺派においても、動物供養についての特別な決まりなどは存在せず、末寺の裁量に委ねられているのが現状である。

一方、日本においては、動物供養の歴史は古い。縄文時代遺跡では、しばしば犬が埋葬された形で出土していることが知られる。そして、最も古いペットの埋葬に関する文献的記録は、奈良時代初期に編纂されたという『播磨国風土記』^{（はりまのくにふどき）}（七一三〜七一五年頃）にみることができ、『風土記』の記述によると、応神天皇が播磨に狩りに出かけた際、マナシロと名づけられていた猟犬が猪と闘って死んだので、その忠犬ぶりを悼み、帝が近くの位夜^{いんや}という名の丘陵に埋葬したという。このように出土資料や文献記録により、古代より人間とペットに当たる犬が親密な関係にあり、その死に際しては大切に埋葬されていたことがわかる。

また、医学の進歩のための動物実験など、人間の都合によってその命を断たれた動物たちの菩提を弔う目的として、多くの大病院や企業において供養祭や法要が営まれている。このような動物のための慰霊行為は、海外においてもほとんど見ることができず、人間とその他動物の生命を等価値としてみる宗教観、仏教的にいえば「一切衆生悉有仏性」の思想が日本独自に深く根付いた供養の形態といえよう。

本稿では、筆者の属する日本臨済宗門において、過去の禅僧たち（「祖師」という）が身近な動物たちと如何に接し、その死に際してどのような弔いや供養を行ったかを概観しながら、動物供養の意義を考えたい。

二、中国禅僧と動物

日本の他の仏教諸宗派と同じく、臨済禅も鎌倉時代初期頃から、明庵栄西（一一四一～一一一五）を初めとした祖師たちによって、その教えが伝えられ、時を経て日本化した。

そして、動物供養に関して言えば、中国社会においても、古くから行われていたようである。中国の西の果て、オアシス都市・敦煌にある石窟寺院やそれを彩る壁画で名高い莫高窟において発見された文書の中に動物供養に関するテキストの存在を、石井公成氏が紹介している。

石井氏によると、大英図書館に所蔵されるスタン文書のS四〇八一及びS五六三七の願文集には、犬や馬がその生前によく主人に仕えたことから、その行いに対し感謝を込めて、来世はより良い世界へ転生することを祈念する内容が書き付けられているという。これらの文書は、正確な成立年代を知ることができないが、その存在により、動物の弔いが、中華において古くから広く行われていた様子を垣間見ることができる。

そして、中国禅僧と動物の関係が深いことは、禅僧たちの言行や問答を載せた語録に数多くの動物たちが話題となっていることから明らかである。例えば『無門関』（一二二八年成立）という禅の語録では、犬や猫が禅問答（公案）の主役として取り上げられている。これらの動物たちは、当然、禅僧の目につく形で禅林内部に入り込んでいたであろう。また、中国禅僧の中には、動物を飼育していた者もいた。『景德伝燈録』（二〇〇四年成立）巻八「南嶽西園蘭若曇蔵禅師」条には、不思議な力を持つ犬が、飼い主である蘭若曇蔵に大蛇や盗賊の災難を未然に知らせたという霊験譚が載せられる。

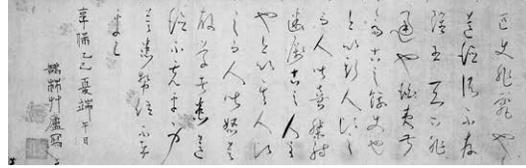
更に、祖師が動物を弔った例も見ることができ。『無門関』第二則「百丈野狐」では、百丈懐海（七四九～八一四）の説法を聞き開悟した老父が、野生の狐に変化した自分の身を亡く

なった僧侶と同様に葬って欲しいと願ったところ、百丈はその願いを聞き火葬している。このように中国の禅僧たちも動物を飼育したり、その死を弔ったりしているが、いずれのエピソードも、一般的な動物を愛玩する、或いはペットの死を弔い慰霊する内容というよりは、神異・霊験譚に属するといえよう。

三、日本臨済禅僧と動物

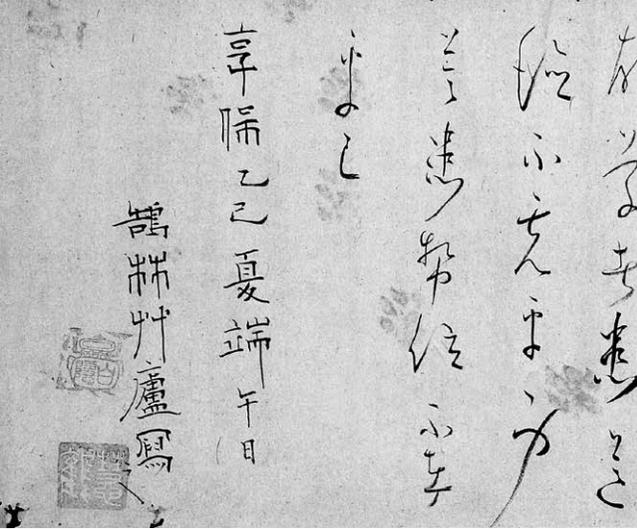
日本の臨済禅僧たちは身近にいた動物たちを可愛がった[※]。例えば、江戸時代中期に「日本臨済禅中興の祖」と称えられた白隠慧鶴（二六八五～一七六九）は、住職をした松蔭寺（静岡県沼津市）で三毛猫を飼っていた。白隠の語録『荊叢毒藥』（二七五九年頃）巻一では、この三毛猫にちよっかいを出す野良猫が松蔭寺に入り込んでいた様子が記録されている。

加えて、白隠には、自身が「猫の巻物」と箱書きした墨蹟が残されている。この墨蹟は卷子の形態を取り、享保九（一七二四）年、白隠が四十歳のときに植松者彌に宛てて書き与えた一幅であるが、諸書の人生訓を書き込んだその巻尾には、六個の猫の足跡が残されている。白隠が本作を揮毫した後、猫がその墨蹟を横切ったのであろう。



〈上〉白隠の墨蹟「猫の巻物」(静岡県沼津市・徳源寺所蔵、花園大学国際禅学研究所撮影)(部分)

〈左〉猫の足跡(上の巻物の部分)



そして祖師たちは、自らが大切にされた動物

たちの死を大いに悲しみ、人間同様、丁寧に葬儀に比する仏事を行い弔っている。例えば、

とんちで有名なかの一休宗純(一三九四〜一四八二)は、六十歳当時、愛玩していた雀が死んだ際には「尊林」と道号を与え哀悼の偈頌を詠んでいる。現存するこの道号頌の墨蹟にはその経緯を次のように言う。

私は一匹の雀を特別可愛がり飼っていた。ある日、忽然と死んでしまった。愛雀を失った悲しみは人との別れに倍するほどである。その死に当たっては人と同じように葬儀を執り行い、かつ「尊林」と道号を与え、ここに書して証となす。(抄訳)

あえて墨蹟として遺したところに一休の愛雀に対する強い哀悼の気持ちを知ることができる。一休は尊林の死後にも、新たな雀を飼い、その死に際しては「葉室」と道号を与えて、同じように懇ろに葬儀を行った。

妙心寺四派の祖の一人・東陽英朝(一二二八〜一五〇四)は、一休と同様、愛育した犬との別れに際しては、法諱を与え、亡僧の如くに葬送し弔いの偈頌を手向け、次のように言う。

十年のあいだ、私に馴れ親しんでくれた。

わが愛犬梨花の生涯も、思えば、花曇りの春の夜の夢のごときものだった。梨花よ、今やあらゆる羅籠から解き放たれた。さあ、煩惱の炎の消えたところへいくがいい。(芳澤勝弘編著『少林無孔笛訳注三』四六七頁、思文閣出版、二〇二〇年、抄出)

また、禅僧による動物供養は、自らが飼育したペットなどに限らず、檀信徒などの求めに応じても同様に行われていた。東陽と同じく妙心寺に属する愚堂東寔(一五七七〜一六六一)は、慶安元(一六四八)年、七十二歳の大仙寺(岐阜県加茂郡八百津町)に在任時代、祟りを取り除くといった、単なる慰霊とは違った事情ではあるものの、人間の場合と同様、馬の死を弔うために偈頌を唱えている。愚堂の語録には飼馬が盗賊と勘違いされて殺されたのを契機に、祟りが村を襲い、その呪いを除くことを依頼された経緯が詳しく述べられている。

加えて、『愚堂語録』(一七九七年)には村人が井戸を掘った際、誤って掘り起こされて凍死した無数の小蛇を弔う偈頌が収録されている。これらの偈頌については愚堂自筆の墨蹟も遺されており、慰霊や除霊の効果が保持されることが願われたことが推測できよう。このように、

愚堂の行った動物供養は、追悼・慰霊という位置づけを超え、除霊などを通した大衆教化を担っていたと考えられる。

四、小結

以上、見てきたように、日本では多くの臨済僧たちが動物を可愛がり、その別れに臨んで、人間に対する葬儀と同様、偈頌を手向けるなどして仏事を行っている。加えて、愚堂東寔のように檀信徒などの要請から、自らが飼育した動物以外の供養にも携わった者もいた。彼らの行った追悼は、単なる動物たちのための慰霊や鎮魂に留まらず、除霊を通した大衆教化の一面を有している。

注3・安藤氏論文でもすでに指摘されているが、このような祖師たちのペットや動物供養への真摯な態度からは、仏教の輪廻観を大前提としながらも、甲う対象としての動物を単純に仏教的価値観に当てはめて、前世の悪業により畜生道に堕ちた存在として位置づけている様子は窺えない。日本においては、古来動物の埋葬や葬送が行われてきた歴史があった。日本臨済禅僧たちが行ってきた動物供養は、それらを素地として、仏教の最も基本的な教義の一つ、即ち一切衆生悉有仏性の思想が浸透するなかで執り行われてきたといえる。

現在、我々臨済宗門でペット供養を行う際には、天倫楓隠撰『諸回向清規式』（一六五七年）「畜生通回向」などを唱えることが多い。その回向文を見ると、

六道の幽迷を出でて清浄の覚路に至らんとを。（「畜生通回向」）

とある。畜生道に在る存在は、そこから一挙に輪廻から脱することは不可能とされるが、現在の臨済宗門で使用する回向文では、人間と同じく、畜生道からの直接的な解脱を言うことも注目に値する。このような姿勢は、先に見た東陽英朝の偈頌からも読み取れることから、祖師たちは、動物を単なる畜生と見るのではなく、仏性を備えたあらゆる生き物、すなわち「衆生」として理解し続けていたと推測できる。

一方、ペットを家族同然に大切にす現代においても、動物と人間を全くの等価値として見ることが難しいことも我々はよく知っている。令和六年一月二日、羽田空港で飛行機事故が発生した際、旅客機の乗員乗客は幸い全員無事であったものの、機内に預けられたペットが、助け出されなかったことがニュースになったことをきっかけに、議論が沸き起こったケースを見ても明らかであろう。

臨済宗の僧侶は、先に見たように、現代的価

値観に単純には当てはめられないものの、古くから人間と動物を同じ衆生として扱うように丁寧にその死を悼んでいる。人間と同等に動物の生命を大切にしなければならぬということ、その死に接し、丁重な弔いや供養を行った禅僧たちの姿勢から学ぶことが出来るといえるのはなかるうか。

（たきせ しようじゅん・花園大学国際禅学研究所客員研究員）

著書に、中尾良信・瀧瀬尚純共著『日本人のこころの言葉 栄西』（創元社、二〇一七年）など。

1 石村耕治「ペット葬祭をめぐる宗教法人課税事例の分析／宗教法人のペット葬祭施設やペット墓地は非課税か、ペット葬祭は宗教活動か」（『白鷗法字』第二十一巻第二号、二〇一五年）
2 石井公成「17・ペット供養は唐代からあった」（『仏教のヨコ道ウラ話（ネットサイト・トイ人）』2022年10月14日／2024年8月20日現在閲覧可能。）

3 曹洞宗僧による動物供養の歴史は古く、瑩山紹瑾『瑩山清規』には、歳末に遍く動物の供養を行うことが規定されているという。詳細は、澤城邦生『瑩山清規「歳末看経勝」・「除夜施餓鬼疏」に関する一考察——出典とその背景について』（『宗学研究紀要』三十六、二〇二三年）を参照。

4 安藤嘉則「日本禅宗における衆生の成仏と供養の問題」（『日本仏教学会年報』八十六、二〇二一年）では、東陽以外の禅僧による動物供養の実例が紹介されている。なお、本論文では動物供養について、詳細な考証と論述がなされているので、参照された。

5 禅文化研究所編集部『大圓寶鑑國師墨跡集』（八八〜八九頁、二二五頁、愚堂禪師三五〇年遠諱事務局、二〇一〇年）参照。

イスラエルにおいて 戦争に動員される

人間／動物の境界

保井 啓志

YASUI
Hiroshi



二〇二三年一〇月七日のハマースによる越境攻撃以降、ガザ地区に関する動向は世界中の注目を集めることとなった。このガザ地区に関する動向では、「人間とは何か」がしばしば焦点となっている。例えば、イスラエルのガラント国防相はハマースによる越境攻撃のわずか二日後にガザ地区に対する封鎖を宣言したが、その際「我々は人間動物（ハヨット・アダム）と戦っているのだ」と、あたかもガザ地区の人々が人間以下の動物であるような発言をした^{*1}。またアラブ文学研究者でパレスチナ問題について積極的に発言をしてきた岡真理は、ガザでの虐殺を「人間の恥としての」と表現している^{*2}。このように今回の事態については、「人間とは誰を指す

のか」が一つの争点であったということができる。しかしながら、今日イスラエルで顕在化しているような、人間／動物の境界と戦争の関係性は決して単純ではない。本稿では以下に大きく二つの点に整理しながら、今日イスラエルで現れる両者の複雑な関係性を解きほぐしていきたい。前半では、伝統的に人間／動物の境界が近代国家や戦争においてどのような意味を持ってきたのかを概観し、後半では、この伝統的な枠組みでは捉えきれない近年の新たな展開について論じていく。

人間／動物の境界と近代国家・戦争

現在我々の暮らす社会システムは、「自律的主

体」を中心とした近代国家の枠組みに大きく依拠している。啓蒙主義の影響を強く受けヨーロッパで成立したこの近代の社会システムでは、自律し、自らの意志を持った個人すなわち「主体」の存在が前提とされ、同時にこの自律的主体は国家や社会、法といったあらゆる制度の基本単位として位置づけられるようになった。この社会制度の下では、とりわけそれ以前の中世の「宗教的蒙昧」から解放され、理性によって自らを律した「人間」に根源的な価値が置かれる。この意味で、近代のあらゆるシステムの大元には、「ヒューマニズム（人間主義）」とも呼ばれるものがあつた。

このヒューマニズムは一方で、根源的に「人間中心主義」であつた。「誰が人間か」という問いを生み出したからである。この「誰が人間か」という問いのもと、あらゆる尺度においてその適性が判断されてゆくことになったのである。例えば「ヒステリック」という言葉が表すように女性は伝統的に理性的な考えを持たないとき、また一方で同性愛は精神の病と見なされ、黒人などの人種の他者は知能の低い「獣」と差別的な表現で表象された。近代にヨーロッパで始まったヒューマニズムは女性性や障害、セクシュアリティ、人種といったあらゆる序列関係をほとんど交差的かつ網羅的に含みながら、典

型的ではない者を「人間ではない」存在として規定し、排除する制度として立ち上がった。特に、その峻別に際しては論理的思考、すなわち理性の有無が問題となったのである。そしてこの時、権利の対象であり同時に国家の主役となるべき国民Ⅱ主体である「人間」は、あらゆる面で理性の外側にある「獣性」と切り離され、反対に、動物Ⅱ獣であることは、「人間」との共通性を持たないカテゴリーとして、根源的にその外側に置かれることになった。

この理性を基準にした人間／動物の二元的カテゴリーの確立は、同時に文明圏と非文明圏を区分する想像力を生み出し、植民地主義と結びついていくことになる。ここでは、ヨーロッパの外側に住む人々は進歩的な近代化を成し遂げておらず、より自然や動物に近い野蛮人と表象された。この想像力において真つ先に異質な他者が像が投影されたのが、オリエントと呼ばれる地域に住む人々、アラブ人であった。ここに、パレスチナ人を十分に主権者たりうる人間のカテゴリーから排除するような人種差別的な思想の系譜が存在する。

一方で、ヨーロッパのユダヤ人は、複雑な歴史を辿った。ユダヤ人は歴史的にこの近代の主権者と獣という二項対立において劣位に置かれ、人間としての権利の庇護に値しない存在として他者化された。しかし、そこからユダヤ人を国

民の主役と位置づけ、ユダヤ人自らの国家を持つとうとするシオニズムの思想が立ち上がり、イスラエルが建国されることになる。すると、シオニズムにおいてユダヤ人に割りあてられた否定的なイメージは、自然と反転することになる。シオニズムにおいて、今度は主権国家を持つにふさわしい主体／人間と、それにふさわしくない未開で野蛮な獣／動物という構造のなかで、後者がパレスチナ人に対して適用されることになったのである。実際に、イスラエルの政治において、これまでもパレスチナ人を人間以下の動物と揶揄する発言は繰り返行われてきた。例えば一九八二年に当時首相であったメナヘム・ベギンは、アラブ人を念頭に置きながら、もし二足歩行する動物が襲ってきてユダヤ人の子供たちを守らなければならないと発言している[※]。冒頭で紹介したガラント国防相の発言も、パレスチナ人を人間以下の動物と見なすこの系譜の中に位置づけることができる。

さらに、この人間と動物という二項対立及びこの人間性を基準にした「人ならざる者」の排除は、象徴的な次元だけでなく、制度的な次元でも働いていることを忘れてはならない。近代国家はその領域内での人権の尊重を謳い、人々を平等に扱うことになった。しかしその建前に付随して生まれてきたのが、国家の外側に存在する人々をどう扱うかであった。すなわち難民の

問題である。難民は、主体／人間に限りなく近い存在である一方で、その範疇に含まれない人間以下の存在と見なされてきた。建前上人権を尊重し、「宗教的規範」から解放された人間を基礎に置く近代国家あるいは民主主義体制の国家において、最も苛烈な暴力が「そもそも主体／人間として認めない」ことを通じて行われるのである。こうして、国籍を与えられない者たちは、国家が振るう暴力の直接的な対象となるのである。

イスラエルは一九六七年以降ガザ地区やヨルダン川西岸地区を占領下に置きながら、占領下にあるパレスチナ人をイスラエル国家の市民としては見なさず、その政治的権利を認めなかった。この恣意的な人間の境界設定によって、本来その範疇の内側にあるものとして認められれば侵害されるはずがなかった人としての権利が、「人権の尊重」というイスラエルが掲げる建前とは矛盾することなく、継続的に侵害されてきたのである。このようにパレスチナ人は、ユダヤ人を主役とした国民国家の中で、正常な理性を持たない人間以下の存在と位置づけられ、また一方で、制度的に主権Ⅱ人権の保護される範疇の外側に置かれたという意味で、実際に剥き出しの国家暴力にさらされてきたのである。そこでは象徴的な意味にとどまらない、文字通り人間以下の扱いを受けてきた。

「動物の権利先進国」イスラエルと倫理的優位性

このように、近代国家が「全ての人の人権を守る」というその前提を崩さずに戦争という人権侵害を行うやり方は、まさに特定の者を人間と認めないことを通じて行われたのである。イスラエルにおいては、その国家暴力に継続的に晒されてきたのがパレスチナ人であったといえる。しかしながら、近年では、この伝統的な人間と動物をめぐる区分けとは異なる展開が生じているのもまた事実である。それが、人間だけでなく動物にも権利を平等に付与するという考え方の普及、すなわち動物の権利意識の台頭である。イスラエルでは近年、動物の権利運動が盛り上がりを見せてきた。動物の権利運動は動物に慈悲深く人道的な扱いを求める「上からの」動物愛護運動とは異なり、人間と動物の関係性を「種差別」と捉え、人間と動物の不均衡な力関係を見直すことを要求する。そして、女性差別や人種差別が許容されないと同様に、動物に対するあらゆる差別的な待遇は許されないのであって、食用利用や動物実験といった人間による抑圧と搾取からの動物の完全な解放を求める。この動物の権利運動がイスラエルにおいて注目を集めたのが二〇一〇年代であった。二〇一二年に著名な動物の権利活動家の講演動画^{※4}が広

まったことをきっかけにヴィーガン（動物由来の製品を使用しない生活様式を採用する人のこと）の人口が飛躍的に増加したとされ、「ヴィーガン革命」として知られている。これらのヴィーガニズムの「主流化」の背景には、動物の権利運動に携わる活動家の草の根の取り組みがあったことは言うまでもない。

しかしながら、この動物の権利に関する成果は、人間ではない存在（ここまで見てきたように、この場合パレスチナ人を含む）にも人間と同等の扱いを求める、より平等主義的な社会制度の構築に向かうというよりは、むしろその精神が換骨奪胎されてうわべだけを国家に利用されている。その最たるものが、イスラエル国防



イスラエル国防軍のヴィーガニズムに関する投稿で用いられている画像^{※6}

軍によるヴィーガンウォッシングだ。これはヴィーガンという言葉と、「ごまかす、うわべを取り繕う」という意味のホワイトウォッシングという言葉をかけ合わせた造語である。この言葉は、イスラエル政府がパレスチナの長引く占領やパレスチナ人への人権侵害といった負のイメージを、動物の権利に関する先進的なイメージによって覆い隠していることを批判するために用いられる。このヴィーガンウォッシングの事例は枚挙にいとまがない。イスラエル国防軍は国際ヴィーガンデーに合わせてイスラエル国防軍がヴィーガン・フレンドリーであり、仮に徴兵された兵士がヴィーガンであっても無理なく軍務につけることをアピールする^{※5}。ほかにも

イスラエル政府はYouTubeで経済の中心地テル・アヴィヴが「世界のヴィーガニズムの中心地である」という広報宣伝を積極的に行っている[※]。このようにイスラエルで高まるヴィーガニズムと動物の権利意識は、イスラエルのイメージ戦略に用いられているのである。

そしてこの時見逃してはならないのは、この動物の権利に対する意識の高さは、まさに倫理における優位性につながっているというところだ。イスラエル国防軍はこれまでも自らが「世界で最も倫理的な軍だ」と高々と宣ってきた。特に、パレスチナとの争いを「テロとの戦い」と位置づけるイスラエルにとって、この「倫理的な我々」という位置づけは、「倫理的でない、野蛮なテロリスト」というパレスチナのイメージを補強するために用いられる。特にヴィーガニズムは自らの軍隊が動物にも優しいという倫理的水準の高さを主張するのに格好の道具である。事実、イスラエル国防軍はSNSなどで自らがヴィーガン・フレンドリーな軍隊であることを積極的に広報する傍ら、ハマースがガザ地区で自然を破壊する野蛮な行為を行っていることを非難するような投稿も行っている[※]。

おわりに

このように、今日イスラエルで現れる人間と動物の境界は、ねじれた形で戦争に動員されている。

〈動物〉から問われる〈人間〉

い「人ならざる者」と位置づけ排斥し攻撃するような認識的暴力が一貫して働いている。

(やすい ひろし・人間文化研究機構人間文化研究創発センター 研究員、同志社大学研究開発推進機構(都市共生研究センター)学術研究員)

著書に『イスラエルの世論はどう動いたか——越境攻撃の世論調査から見る』(東京大学出版会、二〇二四)など。

1 Yoor Zaiton. 2023. Galant: Mator muplat yutal ta ha-revut ah: Anu nihnamim be-hayot' adam. Ynet, October 9, 2023. <https://www.ynet.co.il/news/article/b3rvrbzp> (Accessed August 14, 2024).

2 〈パレスチナを生きる人々を想う学生若者有志の会〉 2023. YouTube, ガザを知る緊急ゼミナールガザ人間の恥としての(2023年10月23日) / 2023年10月24日. <https://www.youtube.com/watch?v=baPQJgGc> (2024年08月15日閲覧).

3 1983年4月13日のイエデイオットアハロノット紙に掲載。

4 Yourofsky, Gary. 2015. YouTube, "Gary Yourofsky - The Most Important Speech You Will Ever Hear." February 7. <https://www.youtube.com/watch?v=U5hGQDLpA8> (Accessed August 14, 2024).

5 Israel Defense Forces (@IDF). 2018. X, August 14. <https://x.com/IDF/status/1029448371646423041?s=20> (Accessed August 14, 2024).

6 それぞれ出典は「Israel Defense Forces (@IDF). 2015. X, November 2. <https://x.com/idf/status/660838006690078720> (Accessed September 25, 2024)」「Israel Defense Forces (@IDF). 2012. X, November 1. <https://x.com/IDF/status/26401637469020160> (Accessed September 25, 2024).

7 Israel. 2018. YouTube, "How Did Tel Aviv Become the Vegan Capital of the World?" November 11. <https://www.youtube.com/watch?v=O4fjPaXHK4> (Accessed August 14, 2022).

8 Israel Defense Forces. 2018. X, August 14. <https://x.com/IDF/status/1029448371646423041?s=20> (Accessed October 7, 2024).

衆生の生命を受けるとは

本多
弘之

HONDA
Hiroyuki

仏教語の「衆生」は、「生きとし生けるもの」を意味する印度語の「サツトバ」の翻訳語である。そして翻訳者によっては、それを「異生」とも「群生」とも「群萌」とも訳している。それらの訳語は異なるとも、その根底には同質の生命観ともいえるべき「六道流転」の思想が脈々と流れている。この生命観からは、例えば、自己の過去の生命において畜生（いわゆる動物）とか餓鬼や天人であったであろうこと、また未来の自己の生存に地獄や修羅というようなあり方がありうるということが想起されてくる。その生命の流れから、現在の生存する身体の形は違っていても、衆生としての生命の持つ同質性が感受されるし、

また同じ人間であっても異質だと言うしかない事柄が起こってきていることも感得されてくる。現代を生きる私たちが、こういう「衆生」という生命観から、人間と動物たちとの関係を考察するには、現代科学、そもそも生命の歴史がどのように歩んで来たと考えているのかにも触れておく必要があると思う。

生命体であることには、現代科学によって解明された事柄として、生死する身体、すなわち生まれて滅していくという生命の普遍的代謝作用の根底に、遺伝子を構成する生体分子がはたらいっているということが見出されている。その遺伝子の構成が長い時間軸をくぐって突然に変

化する場合があります、ダーウィンが見出した種の起源の正当なことが確かめられてきている。そして、衆生は種によって共業（仏教語、ごうごう）といわれるような同質性を与えられながらも、個体として生存することには、如何にしても他には変換できないそれぞれ独自の事実があるとも言えるのである。

一、時の要素

生命を受けることには、不可欠な要因として「時・処・所縁」ということがある。この三要素抜きには、具体的なこの世に生存する身体は成

り立たない。

その中の「時」とは、地球という天体が宇宙において太陽系の惑星であり、そこに回転する天体群の一つであることによって、ほぼ同一の回路を、太陽を中心に繰り返し回っていることで成り立っている。これによって、長期の時間軸や短期の時間軸があることになる。生命体が地球上に現れてくるのは、この長期の時間軸上では、最近の数億年とされる。生命の起源は、未解明ではあるが、海水が存在することで生命が誕生したのではないかと、ということが推測されている。そして、生命の繰り返しの中で、海中に発生した植物から陸上に生ずる植物が生まれ、また海中に存在した動物も、何かの機縁で陸上に上がるようになり、人間の存在が確認されるのは、ごく最近の数百万年の事柄でしかないのではないかとされるのである。

その後数十万年のときが過ぎて、地球上の大陸の変動、すなわち海底が高山となったり、大陸同士が大きく移動したりしたあとで、人間が活動を活性化してきたのであるとされる。日本の国土も、数万年前までは大陸の一部であったという研究もある。

こういう生命の歴史を受け、人間の歴史が歩みを進めて、現代社会を構成するまでに至って

いる。生命の歴史では、常に生存に適應できる種が生き残っていく。とくに人間には二本足で立ち上がることが起こり、手の使用が発達したとされる。そして様々な好条件が備わり、言葉による表現が生み出され、人間が知恵を蓄積できるとようになってきたのである。

二、処の要素

そもそも衆生の生存には、「処」という要素が考察されている。「処」とは、身体を取り巻く環境である。それは空間でもあるし、場所でもある。地球上の様々な場所に適應して、様々な動植物が生きているのだが、人間は知恵によって自己の身体を防護する衣服をまとうことで、どのような生存環境にも適應していく。しかし、生存が与えられる場合の環境には、単に空間的な異なりのみでなく、先に述べた時代の異なりからくる変化もある。時代が変化する時、いわゆる社会体制や経済的な流通構造なども変わってくる。

人間は集団で各々自己の生存を確保して、他の集団との闘争を繰り返しながら、それぞれの文化を生み出してきた。その集団が国というものを作ることになる。

三、所縁の要素

そしてこの世に生存が与えられることについては、「所縁」として押さえられる無数の条件の重なり合いがあるとされ、それにより、「諸有」というあり方が言われてくる。「諸有に流転の身とぞなる」と親鸞は言われるが、具体的に一個の生命体は、一回限りの生命を一つの身体において限られた時代と場所に、しかも自我の執心と共に生きることになるのである。その生命としての背景は、時間・空間(時・処)を通して、無数の生命に囲まれ、そこに一回の生存する身体が衆生としての生命を与えられてくるのである。かくして衆生として生命を受けることには、一つには、不可思議の因縁の恵みと仰がれるべき、一切衆生に恵まれている普遍の生命力とでもいうべき面と、もう一つには、しかしながら個体が現前するには無数の不可思議な因縁関係が具現してこそという面がある。この二面が並存しているのである。

(ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長)

光源氏の隠遁

吉田
真樹

YOSHIDA
Masaki

一

「光る」源氏というのはあだ名だが、その名の通り、光源氏は最後の最後まで光っていた。出家直前の御仏名おぶつみやまの日に、久しぶりに人前に姿を見せた光源氏の「御容貌」は「昔の御光にもまた多く添ひて、ありがたくめでたく見えたまふ」ものであった（『幻』巻、新編日本古典文学全集『源氏物語』④五五〇頁）。最後まで光を増し続けた光源氏の姿に導師も涙を禁じ得なかったという。隠遁後、光源氏は作中に二度と姿を現さない。光なき次世を描く後編において、隠遁の「二三年ばかりの末」に亡くなったと明かされるのみであった（『宿木』巻、⑤三九五頁）。

本居宣長はこの点について、「紫上のかくれ給へるを、源氏君のかなしみ給へるにて、ものあはれのかぎりをつくせり、……もし源氏君のかくれ給へるかなしさを、かゝむとせば、たがうへのかなしみにかはかくべき、源氏君ならぬ人の心のかなしみにては、深きあはれは、つくしがたかるべし」と分析し、光源氏の死を悲しんで深い「あはれ」とすることができている人が作中にいないこと、それが作者が光源氏の死を描かなかった理由の一つであるとした（『源氏物語玉の小櫛』、『本居宣長全集』第四巻所収、四六八―九頁）。

宣長がいうには物語の本意は「もののあはれ」を知らせることにあり、我々読者はそれを知るために物語を読む。そこからすれば、親しき者に先立たれ続け、悲しみ続けた光源氏が具現化する「あはれ」、紫の上の死によって最大化された「あはれ」を、我々読者は受け止め、知らなければならぬことになる。それはもちろん我々の成長のためだとされるが、逆に光源氏の側から考えてみるならば、いわば、光源氏を知り、救済するのは我々読者であるとされていることになるのである。果たしてそのようなことが可能なのだろうか。光源氏の体現した極限の「あはれ」を、我々読者は理解できるのだろうか。

例えば近松門左衛門作の『曾根崎心中』であれば、「貴賤群集」が自ら称えた念仏の功德を、大念仏のような形で心中したお初・徳兵衛に向向して、二人の救済が果たされている（この「貴賤群集」は読者を含む広がりをもつと見てよい）。この種のことを『源氏物語』でも可能だと宣長は考えているのだろうか。

宣長の発想は、国学者として近世的な次元にとどまっている。宣長が、近松に近い構図で考えていることは間違いなく、より根本的に問題であるのは、宣長の『源氏物語』解釈には、仏に対する信心という観点が欠落していることで

ある。隠遁した光源氏が求めた救済が、阿弥陀仏に知られ包まれる救済以外のものでないことを宣長は無視し、「あはれ」を酌めばよいとしているのである。

三

宣長の解釈においては、仏による救済が「あはれ」に置き換えられているといえる。物語のゴールを成仏に設定すると、「幻」巻までの光源氏を中心とする全過程が煩惱として一括され、否定されてしまうと宣長は恐れたのだろう。光源氏の隠遁期を描かないのは、作者が煩惱として物語を書いていない証拠であり、したがって物語のゴールは成仏ではありえず、「あはれ」こそが物語のゴールだったのだと宣長は読み換えた。

しかし、光ったままの隠遁とは、古い・衰えゆえの一般の隠遁とはどうしても異なっているように思える。光源氏の生・老・病は、現にすべて尋常ならざるものであったし、したがって描かれぬその死も尋常ならざるものであったはずだろう。尋常ならざる光源氏はたとえ出家隠遁したとしても、そのことよってそれ以前の物語が全否定されるなどと、通俗的に考えるべきではない。そもそも出家以前の全否定となる出家ならば、光源氏は出家しなかったはずである。恋文を焼くことを通して、紫の上との出

逢いの唯一無二性を、かたよ形代（身代わり）としてではなく正しく肯定し、またそれぞれの女君たちとの出逢いの唯一無二性をも正しく肯定し、逆からいえば、藤壺宮との出逢いの唯一無二性を、執着としてではなく正しく肯定し、それらすべてを通して己れの業を受け止めることこそが、光源氏の出家の目的だったのではないだろうか。

光源氏は最初から、僧侶を感嘆させるほどの誰よりも深い仏道理解を見せ、仏道修行への憧れを強く抱いていた。仏道修行への憧れは、宣長のいうような悲しみから起こるのではない。外から来た悲しみが己れに食い入り、悲しみ続けることが己れと不可分のものとなり、次第に内なる苦しみとして堆積する。そして、この内なる苦しみこそ、己れだと気付くことから起こる。光源氏は、恋に由来するこの内なる苦しみ、即ち己れの業を抱いたまま、西に向かい、南無阿弥陀仏と称えたに違いない。

（よしだ まさき・静岡県立大学国際関係学部教授）
著書に、『光源氏はなぜ光るか——『源氏物語』の倫理想』（近刊）など。

「満蒙開拓」の被告席 ―学び合いの場から考える―

三沢
MISAWA
Aki
亜紀



1. 被告席

アウシュビッツ収容所から生還したというカナダ在住の女性Hさんのお話を、オンライン講座でお聴きする機会があった。終戦時は十七歳。両親や友人たちをホロコーストで亡くしている。

一九四四年、ドイツがハンガリーを占領。Hさんたちユダヤ人は家畜用の列車に押し込まれ、暗闇の中を三日間立ったまままで、ポーランド南部のアウシュビッツへ連行された。到着後まもなく両親とは別の列に並ばされ、灰色のシャツワーム室へ。男たちに濡れた裸のまま丸刈りにされ、投げつけられた収容服を下着もなまま着せられる。くすんだ窓に映る自分たちの姿を見ても、どれが自分なのか、分からなかった。

戦後、カナダに移住して人生を歩んできた。収容所のことには口を閉ざしたまま。そんなHさんのところへ、ドイツから裁判での証言の依頼が届く。戦後七十年が経過していた。ドイツは司法制度により今でもナチ親衛隊員の罪を問う。時効は無い。被告人たちもすでに九十歳を超えている。

Hさんは考え抜いた末に証言台に立つことを決意する。「ドイツへは行きたくなかった。しかし、亡くなった多くの人々、声を奪われた人々のために行こうと思った」。封印していた記憶を言葉にした。そして、彼女を支えてくれるドイ



満蒙開拓平和記念館外観

ツの人々、学ぼうとするドイツの若者たちと出会う。Hさんは言う。「裁判で証言できたことは、亡き両親の墓に花を供えたような思い。ドイツへの憎しみから解放された。肩の荷がおりた」と。ドイツが今に至るまで徹底してナチの罪、自国が犯した犯罪を問い続ける姿勢の厳しさは、国際社会からの信頼を得る所以であろう。裁判

の中で被告人たちが語った言葉は、ホロコーストの残虐性や人々が陥った狂気を想起させ、時代を超えて今を生きる私たちに様々なことを問いかけてくる。そして、Hさんのように今でも裁判によってようやく心の傷を癒し、憎しみから解放される人もいるのだ。貴重な証言を聴き、考えさせられた。では、「満蒙開拓」において被告席に座るのは、いったい誰なのか。

2. 国策推進の背景

一九三一年十二月生まれの「満子」という伯母がいる。かの満州事変から「満」の字をとったという。日本の権益を脅かす中国を成敗し、満州各地を制圧していく日本軍。ここは日露戦争で命を落とした八万もの英霊が眠る地だ。今こそ日本の力を示す時。沸き立つ日本国民、その空気が伝わってくるようだ。

翌一九三二年三月に満州国が建国を宣言する。国旗は五色旗。「五族協和」「王道楽土」を掲げた多民族国家の誕生を謳い上げたが、その国の実権は関東軍を中心とした日本側が握っており、日本政府も追認せざるを得ない状況となる。国際連盟は満州国の不承認と日本軍の撤退を決議したが、ついに日本は連盟を脱退。大陸進出へ突き進んでいくこととなる。

初期の開拓団は屯田兵の発想から武装移民として入植した。一九三二年十月。建国の年の秋である。まだ各地に割拠していた軍閥の残兵やその支配下にあった住民たちが反日行動を続けており、治安は安定していない。だからこそその武装移民団である。強引な土地の買い上げなども不信を招き、一年目、二年目に入植した開拓団は蜂起した現地住民の大集団に襲撃を受け、応戦の結果数名の犠牲者と多くの退団者が出る始末。前途多難な状況でありながら、農業移民はその後も進められ、一九三六年、広田弘毅内閣で国策となった。

その後、治安維持とソ連からの防衛という移民の軍事目的は、昭和恐慌下の農村経済の立直しと絡まり合う。つまり、関東軍と拓務省が進めた満州移民は、農林省の政策と融合していくのだ。恐慌下、農林省は経済更生運動を展開。市町村ごとに経済更生計画を立案させる。テコ入れとして経済更生指定村には補助金が交付されるが、ここに満州への開拓団送出を推し進める「分村計画」が組み込まれる。「満州へ分村をおこなうことは銃後国民の義務であり」と、かつての長野県富士見村は村民総会で打ち上げた。満蒙開拓はこうして県および市町村といった地方団体が担うこととなる。

もともと海外移民に積極的であった長野県は、国に先んじて集団移民を画策。一九三七年には

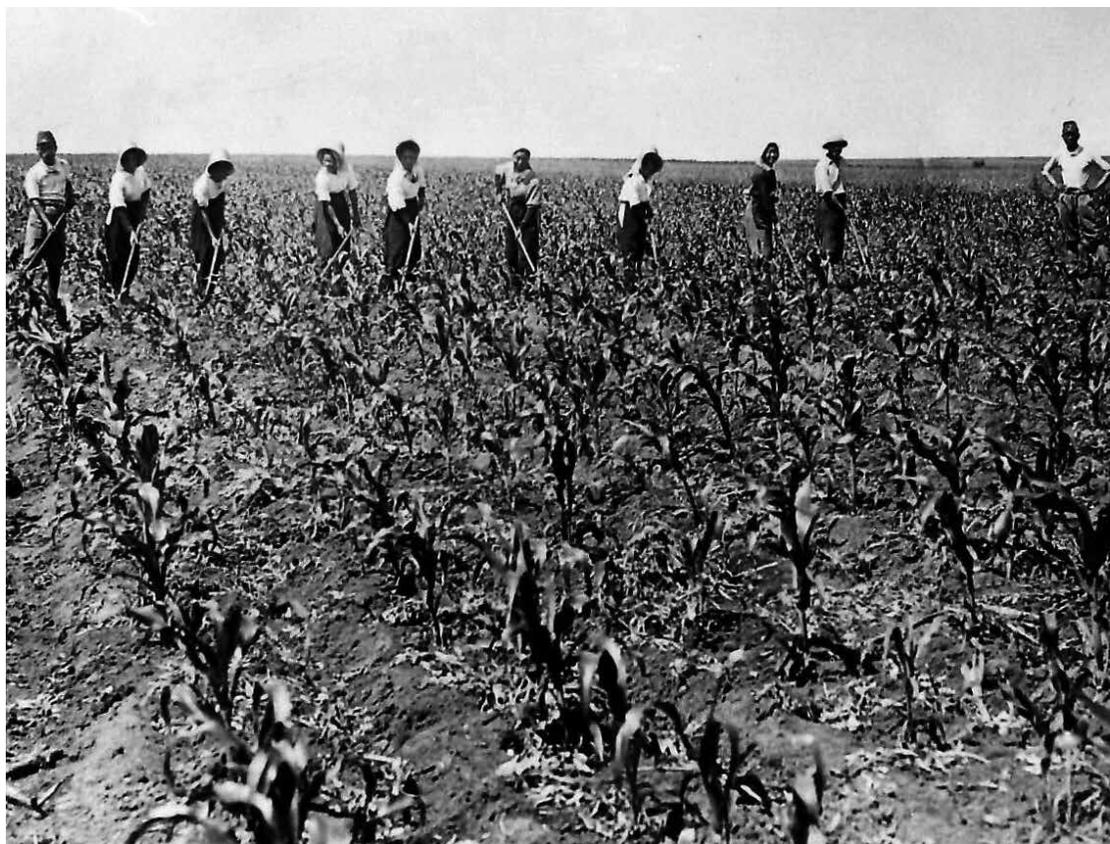
日本初となる県単位の開拓団を送り出している。満州移民をリードしていく長野県。各村々でも積極的に分村計画が立案され、その立案会議に関わった村内各種団体のリーダーたちが推進役として宣伝、勧誘に動いた。

3. 開拓団の本質

開拓団は軍事的な目的から主に北滿の関東軍と共にその周辺に配置される。軍へ食糧を供出する後方支援部隊であり、治安の維持も担わされていた。負債を抱えた小作農の人たちにとっては逼迫した事情もあったが、大東亜建設のため、日本人こそが満州における指導者の立場に立たなければならないという自負もあった。将来の開拓団として送り出された青少年義勇軍たちはまさにこのような教育のもとで満州を目指し、開拓団以上にソ満国境近くに配置されたのだ。

「満州開拓民入植図」が当館の展示にある。国境近くにずらりと並ぶ開拓団は、ソ連側からみると、日本が置いた軍事基地に他ならなかったという。そして忘れてはならないのは、この地にはもともと住んでいた人々がいたということ。日本からやってきた集団、開拓団によって家や農地、生活を奪われた人々の存在である。さらには、軍関連施設の建設、国土の開発や重工業をはじめとする産業振興のため、多くの現地住民が労働力として動員され酷使された末に夥しい犠牲者が出ていたことも。

満州国を理想の国家とし、国策として進められた満蒙開拓は、誰かの犠牲の上に成り立つものではなかったか。



長野県岡谷市周辺から送出された岡谷郷開拓団（1943年）

そのような日本人が、アジアの人々の尊敬を集め、「大東亜共栄圏」のリーダーたり得たのだろうか。

4. 語れなかった「満州」

国策「満蒙開拓」は結局終戦まで止められることはなかった。最終局面では統制経済下で商売ができなくなった都市部の人たちの転業移民まで進められていく。戦争協力のために何ができるのか。人々は「何か」に真剣に取り組まなければならなかった。国は、地方は、隣組は、学校は、私は。それぞれの立場で真剣に取り組んだ結果、日本は戦争に敗れ、満州では凄惨な終戦を迎えた。

戦後、命からがら引揚げてきた人々に居場所はなかった。移民として満州へ渡ったとき、日本の家や土地はすでに処分していたのだ。敗戦国日本、内地の人々も食糧難に陥っていた。自分たちが食べていくのに精一杯だ。厄介者扱いを受けたという話はいくらでもある。道端の草さえも「勝手にとるな」と言われた。「満州乞食」という言葉も残っている。ぼろぼろになって引揚げてきた人々を蔑む社会からの眼差し。「満州帰り」「引揚者」への差別感は根強く残る。さらに、侵略の一端を担ったという現実が戦後になって突き付けられる。終戦後の満州で極限状況に陥り、人としての尊厳を奪われ、大切な人を失い、それでも死線を越えて帰ってきた人々。彼らはその傷も癒されないうまま、ゼロから生活を立て直していかざるを得なかった。

また、地域の中には送り出した側の人々の存在もあつ



長野県下伊那郡から送出された水曲柳開拓団（1943年頃）

た。分村計画を立て、推進していった地域のリーダーたちだ。町村長、議員、役場職員、教師、産業組合や壮青年団の役員など。国策とはいえ、結局責任を問われたのは、顔が見える地域の人たちだったのだ。

満蒙開拓という国策の傷は、それぞれの人の心に、そして地域に刻まれている。故に、地域の中ではタブー、触れられない歴史となっていた。

5. 記念館開館と

子どもたちの「なぜ？」

中国残留孤児肉親調査が本格的に始まったのは一九八一年。成田空港へ降り立った第一次訪日調査団四十七名の姿をメディアのカメラが映し出す。「孤児」たちの顔には皺が刻まれていた。一九七二年の日中国交正常化から九年経ってようやく国は重い腰を上げる。終戦から三十六年という歳月が過ぎていた。

長野県南部の下伊那地域は開拓団を日本で最も多く送り出した地域である。残留者も数多くおり、八十年代後半頃から帰国者家族が増えていった。彼らの日本での生活は、言葉や生活習慣の違いもあって経済的にも精神的にも厳しいものであった。この地域で活動していた飯田日中友好協会は帰国者支援団体として日本語教室や交流事業を担った。体験者の語り部事業など

継承活動にも注力する中で、記念館建設に向かって行く。風化しつつあったこの歴史を伝える拠点を作ろうと活動を始めるが、被害と加害が複雑に折り重なった歴史であり、様々な立場性ゆえの向き合いにくさが地域社会に影を落としていた。それでも徐々に賛同の輪も広がり、足かけ八年かかったがようやく二〇一三年、開館にこぎ着ける。計画段階では年間来館者五千人と見積もっていたところ、初年度で約三万人が来館。想定外の大きな反響に対応が追い付かない状況であった。

開館七年目には別館セミナー棟が完成する。目的は次世代への継承。「平和の種まき」である。学校単位での受け入れが可能となるセミナールームや映像ルームが設置され、主に小中学生の来館が増えていった。

「満州」も「満蒙開拓」も今の子どもたちにとっては遠い昔に遠いところで起きた出来事である。また、この複雑な背景は先生方にとっても難解でハードルの高いテーマだ。当館で進める学習では、導入の映像を視聴し、「なぜ？」という問いを立てるところから始める。

- ・満州の様子は日本に伝わっていたのですか。
- ・満州にもともといた現地の人と仲良くする方法はなかったのですか。

・なんで開拓団の人は日本が負けるといこうとを考えなかったのですか。

・今でも取り残されたまま帰れなくなっている人はいるのですか。

・満蒙開拓は日本に利益をもたらしていたのですか。

・満州に渡った人たちがこんな目にあわなかったようにするには、どうしたら良かったのでしょうか。

子どもたちの「なぜ？」は刺激的である。実に本質を突いているのではないか。そして実に多角的・多面的である。これらの質問に正しい答えはないであろう。こうした問いを共有することで、満蒙開拓の歴史を紐解き、何が間違っていたのかを考える。そして、今の社会と照らし合わせてみる。それが、社会のあり方と自分の生き方を問う力になっていくのではないだろうか。

「こんなに苦勞した開拓団の人たちに、国は謝罪や補償をしたのですか？」

これも来館した中学生からの質問である。答えはNOだ。この生徒は満蒙開拓を通して社会の不正を問うたのだ。「おかしいじゃん」と思える力である。

国策として進められた満州農業移民。携わった機関、渡満決定の判断主体など、その背景の複雑さは研究者も指摘するところである。開拓



セミナールームでの学習講話

団の犠牲の歴史を紐解くことは難しい。結果、国は戦争の労苦として開拓団の犠牲も内地での空襲の犠牲者も、戦争受忍論に収斂し収束させているのではないだろうか。

開拓団や中国残留孤児・婦人の苦難を戦争の被害者、帝国主義の犠牲者で終わらせないために、あえて議論の俎上に載せる。当館は必然的にその役割を担う。近現代史、特にアジアでの戦争の歴



ボランティアの説明を聞く生徒たち

史は時にイデオロギーの対立を生む。扱いつらい「満蒙開拓」という歴史にどう向き合い、どう伝えるのか。正解はなく、手探りの日々である。

6. そして、被告席には

先日、長野県内の小学六年生約六十人が来館。ボランティアさんのガイドで展示見学をし、セミナールームで体験者の証言映像やワーク

シヨップを取り入れた学習講話を実施した。出発前に全員そろったところでK先生が話を始めた。「義勇軍を送り出した当時の教師たちを、私は自分の同僚だと思っています。おかしいと思いつながらも、送り出した彼らのことを、他人事だとは思えません」。この国策に加担した教師たちがいたことを、同じ教師として正面から受け止め、子どもたちの前で自らの心情をまっすぐに語るK先生。会場はしんと静まり、子どもたちの視線がK先生を貫く。「教師として、自分が正しいと思うことを君たちに強いること自体を疑う必要があるのかもしれない」。

「満蒙開拓」における被告席に座るのは、誰か。K先生はかつての教師たちと一緒に被告席に座ったのではないだろうか。自分事としての歴史に向き合ってみた時、一体どのような選択ができたというのか、そして今、そうならなかったためにはどうすればいいのかを問う。子どもたちは歴史そのもの以上に、K先生の真摯な姿に学ぶのだ。

最後に、子どもたちの代表があいさつを述べた。曰く、「加害者であることから逃げないでこの歴史に向き合っていきたいです」。心震える瞬間だった。

(みさわ あき・満蒙開拓平和記念館事務局長)

新宿沖

石原

ISHIHARA
Masaharu

正晴



六月の湿度がカンストした地下鉄を脱出し新宿駅東西自由通路を三丁目方面に歩く時、この隧道がもしも切り立った尾根だったら、と想像してみる。遠い、高い山の鎖場や、谷に渡された梯子のような、なんとなくこのラインを越えたら滑落して死、みたいなポイントを脳内で自在に設定して視界に補助線を引く。その透明な補助線から崖下を覗いてみる。予想に反して、崖下には緑の森と薄く刷毛で掃いたような雲がきちんと表現されており、意外に、正しく怖いと感じる。地下道の左右の壁に規則的に並べられて発光している広告パネルは消失して青空と雲と稜線になり、「百万ダウンドロード達成」とか「まずは気軽にお電話を」とかの言葉だけが残されるが、それもやがてゆっくとと下降を始め

下の緑のなかに消えてしまう。早足で過ぎ去る会社員が耳に押し当てた携帯電話になる「お世話になっております」が長く引き伸ばされてパイプオルガンのように空間にこだまする。その残響を引き連れたまま隧道を直進、どこまでも続く尾根道を、あの雲は何故、という感じでのびのびと歩いていく。

紀伊國屋書店を冷やかして三丁目の珈琲貴族の窓際の席に落ち着く。コーヒーが到着するまで、眼下の往来を眺めて過ごす。新宿通りをけばけばしくラップされたトラックが、おそらく歴史上人類が作曲したなかで最低の音楽を大音量で流しながら走り去る（ビートは昔の暴走族の直管コールや大学生の一气飲みの音頭と類似

している）。なめくじが這った跡のような残像が空中にピンク色の半透明の帯を引き、車体间隙もなく並べられていた言葉だけが、その中に残される。新宿追分交差点から引き伸ばされたその帯は世界堂に面した新宿二丁目交差点でトラックがカーブを曲がる時、見えない巨大な壁に激突して霧散する。残された言葉は木の葉のようにきりもみしながら細かな光の粒子になって街路樹の根元のあたりに消える。

なんとなくもしまよしまよしたような気持ちになつて、四谷三丁目まで歩き適当な風呂屋に入る。下駄箱の鍵を番台に預けそのまま脱衣所、浴場、サウナまで早回しで到達。全身に和彫をいれた職人風の老人たちに挟まれ、その背中の

鯉や毘沙門天がデカールのように溶けて剥がれ、サウナ室の扉と床の隙間から浴場へ流れ出していくのを黙って観察している。時計が見当たらず、時間を測るために口の中でずいぶん前に書いた自作の詩を暗誦する。一曲だいたい六分くらい。身体に深く染みついた詩は意味を置き去りにしてビートのみを刻む。あんなにも全体重を載せて書いた詩も今は単にサウナの高温を我慢するために暗誦されている。あほらしくて笑ける。この歌は別れた友人についての歌だったか。あるいは肉親との死別の歌だったか。わけもなく呟かれた自作のポエムたちは狭く薄暗い空間を漂い、天井の隅にある換気扇に吸い込まれていく。口をもぐもぐさせながら、その一部始終を醒めた眼で観察している。

そしてぐにやぐにやになった状態で沖繩そばのスタンドに入りラフターそばとビールを注文する。ラフターではなくソーキそばだったかもしれないが違いがよくわからないのでラフターだとして、そのラフターの表面に規則正しく並んでいる毛穴？とにかくよくわからん穴に突然自己の意識が集中してしまい、そうなると自分では簡単に止めることが出来ず、ますます自我がラフターの毛穴にズームインしていき、そのうちのひとつの毛穴に自我が鉛細工のようにのびのびに伸ばされてぎゅーんと吸い込まれてい

く。新宿の灯りがSF映画のように光の束になりぎゅーんと自分を構成する色が細長い虹のようになった状態で、先ほどわけもなく暗誦していた言葉のことを考える。念仏が彼岸に向かう言葉ならば、サウナの暗闇で意味もなく呟かれた詩が向かうのはどこなのだろうか。身勝手に尾根道に作り変えられて消失した隧道を、仄かに照らしていた言葉はどこにいったのか。下品にラップされたトラックに不本意に連れまわされ、和彫の端に打ち明けられていた言葉は、どこへ向かったのか。ぎゅーん、と引き伸ばされて金太郎飴状態になった言葉は消え、ラフターそばだけが街の灯りを反射している。

板のようなものにしがみついて、靄のかかった凧の海を流されている。べんべらべらべらべら、と軽薄な心臓の鼓動が聞こえる。海水の味で喉が渴いている。寒くも暑くもなく頭上には青空が見えているが、海面すれすれに充滿したガスにより水平線や陸地を見ることはできない。あちこちに叩き割られたような板切れが浮かんでおり、そこには「amazon ギフトプレゼント」「独占先行配信開始」などの言葉が書きなぐられている。抗えない巨大なうねりがゆっくりと持続しており、少しずつひとつの方向へ流されていることがわかる。ああ、みんな沖へ向かうのだ、と思う。足場の約束された彼岸、向こう岸では

なく、岸にぶら下がっているだけの沖へ。古い物語に聞くだけの沖へ。誰も実際には見たことのない沖へ。

詩とは、沖へ向かう言葉のことだ。安全な着地を期待する暇もなく暗闇のなかを跳躍させられた言葉だ。沖には陸地はなく、アンプも置けないのでギターも弾けない。ゆっくり椅子に腰かけて本を読むこともできないし、のんびりビールを飲むこともできない。沖はどこにも繋がっておらず、そこにはただ「〇〇沖」の「〇〇」の部分だけが残滓として漂っている。海面は波一つなく凧いでいて、恐ろしいほど空虚に澄んだ青空を映している。あの日、新宿の雑踏であちらこちらへ放り投げられていた彼らは、椅子もステレオもない新宿沖で今も幸せに暮らしているだろうか。

了

(いしはら まさはる・ミュージシャン)
ロックバンド、SusseiNoBoAz (二〇〇七年結成) の
ボーカル、ギター、作詞作曲担当。アルバム『liquid
rainbow』(二〇一七)、『3020』(二〇二〇)、『GHOST
IN THE MACHINE DRUM』(二〇二二)など。

「心のある人」に

田村 晃徳

TAMURA Akinori

学 校給食に対し「給食費を払っているのだから、『いただきます』を言う必要はない」等の意見があります。その反論としては、「いただきます」の意味で説明することが多いようです。「いただきます」とは、食材となった命ある生き物への感謝の表明であると。つまり「いただきます」とは「命をいただく」ことだということです。命への、加えて、調理してくれた方への感謝が「いただきます」には込められているのです。

しかし、問題はその言葉が常にそのようにはたらいっているかです。日々繰り返される食事の中で、いつのまにか「いただきます」が、ただの食事開始の合図になってしまう。自分も含め、そのような経験をされている方もいらっしゃるかもしれません。

ただ、それは仕方ない面もあります。「いただきます」とは命をいただいていることだという事実が、日常の生活から隠されているからです。食卓に提供されるのを「命」ではなく「料理」として私たちは認識します。「いただく」前提として、「命を奪う罪」をおかしていることに私たちは鈍感すぎるのです。魚の切り身や肉のスライスをみて、その生きていたころの姿を復元するには相当な想像力が必要です。「いただきます」の意味は知っている。しかし、実感が伴うのは難しいと私は考えていたのです。

そのような時に、一冊の絵本にであいました。

『いのちをいただく』（文・内田美智子、絵・諸江和美、監修・佐藤剛史、西日本新聞社）です。図書館で立ち読みしながら泣きそうになりました。

主人公は食肉加工センターに勤める坂本さんです。ある日、坂本さんに牛の解体の仕事が入ります。その牛をめぐる、ある事情を知った坂本さんは殺すのがいやになり、仕事を休もうとします。その時に、息子のしのぶさんが言うのです。

「お父さん、やっぱりお父さんがしてやった方がよかよ。心の無か人がしたら、牛が苦しむけん。お父さんがしてやんなっせ」

(35頁)

もちろん、牛の命を奪う残酷さは変わりません。しかし、誰かがやらねばならない状況もあるでしょう。ならばどのような人にしていただきたいか。この言葉にはしのぶさんの願いがこめられています。この絵本には食事のみならず、多くの大切なテーマが書かれていますので、ぜひご一読下さい。

日常は私たちの一時の感傷などすぐに消してしまいます。でも、私はこの絵本を知ったことで、折に触れ「命をいただく」ことを思い出すのです。自分が園長を務める保育園の園児や職員全員、およそ150人にこの絵本を贈りました。みなが、「いただきます」を感じられる「心のある人」になってほしいと願うからです。

「なめとこ山の熊」と「猟師」に 教えられる実存的課題

菊池 弘宣

KIKUCHI Hironobu

人間と動物について、身に覚えがあることは、平生、私自身、他の生き物を殺し食べる側になっているということである。自分が直接手を下さなくとも、誰かに頼って、動物の生命を奪い、それを買って食べたり、身に着けたりして、有用に使うということがなければ、自身の生命を十分に継ぐことはできないと感じている。自分の生命を活かすために、他の生き物の生命を殺す。大慈悲を説く仏の教えは、その「活殺^{かっさつ}」¹の事実を「罪悪」と押さえ、「罪」の自覚を促してくる。すなわち、成仏道において「活殺」を正当化してよい理由はないのだと、私は受け取っている。

関連して、私は学生時分に会った宮沢賢治の『なめとこ山の熊』という物語を忘れることができない。どことなくつかしい、心温まる生命の交流を感じさせてくださる作品であるが、その結末は衝撃的である。これまで熊を撃ち殺し、その毛皮と熊の胆を売って生活の糧を得てきた主人公の猟師が、最後、一頭の熊に襲われて死んでいくとき、「これが死んだしるしだ。死ぬとき見る火だ。熊ども、ゆるせよ」と心でつぶやき絶命する。「熊ども、ゆるせよ」。私はその一句に心打たれたのである。なぜ、そう言えたのか？その一句について、今改めて案ずるに、自分が殺されて死んでいく側になって、これまで自分に殺されてきた他の生命の上に自分自身の姿を見出すことによって初めて、他の生命を殺し

死なせてきた自分の罪を懺悔することになるのではないか、と思った次第である。

およそ生きとし生けるものには、人間存在には、時に自分が殺されて死んでいくという事実を受容し、引き受けるという究極的な課題があるのだと思われる。そして、自らが被害を受ける側の身になって、自らの加害性としての罪を懺悔する。そういうかたちで自分が為してきたことの責任を取り、加害の側になったものと被害の側になったものが共に生きられる世界を願う、本来の一如に帰るという道筋があると思われるのである。

昨今、「OSO18」を始め、熊の出没・被害のニュースが連日のように報道されている。「熊がかわいそうだから殺すべきではない」という声がある。一方で、「人命第一。市街地でも猟銃を使い、ためらわずに駆除すべきだ」という声を聞く。そういった熊と人間。双方が、被害の側と加害の側、両方の立場を往き来して、繰り返し、離れられないというのが、その実相なのではないか。人為災害という面もあると思われるその問題をどう受けとめていったらよいのだろうか。それはまた、親鸞の言う「本願力回向の信心」における実存的課題に他ならないのだと、私は考えている。

1 『竹中智秀選集〈第一巻〉歎異抄講義』（樹心社、2015年）

リニューアルの辞

本誌『anai』は、親鸞仏教センター発行の定期刊行物の一つである（ほか『現代と親鸞』『親鸞仏教センター通信』）。各紙にはそれぞれ独自の使命が与えられているのだが、特に本誌には、真宗大谷派（東本願寺）が当センターを首都圏に設けた時からの願いがこめられている。

その願いとは、何よりも親鸞の思想信念を前向きに、現代に開いていきたいということである。そのために、まずは我々自身が現代の思想の問題に直参することが求められよう。そこでそれぞれの分野の最前線で活躍されている方々にお願ひして、その分野における現代の先端的課題を提起していただき、その学びを広く読者と共有したいということであった。この願いを体現する誌名として、anaiすなわちサンスクリット語で「合掌」を意味する言葉が選ばれたのである。

親鸞仏教センターは、二十一世紀の初め（二〇〇一年）に立ち上がり、この二〇二一年で早くも二十年になる。本誌は毎年二冊ずつ発行され、すでに四十号を数える。これを機に、当センターのホームページにてウェブ版を公開し、一二月に従来通り紙媒体で刊行することとした。四十一号よりデザインを一新し、今後は毎号特集を組むなど、いっそう今日的な課題を問題提起できる形にリニューアルし、読者にさらなる関心をもっていただけの雑誌を目指したい。

親鸞の思想信念を現代に開くには、大悲たる如来の願心に添って、現代の人間の問題を根源的に問うていくほかないであろう。そこには本願において一切衆生に「至心・信樂・欲生」と呼びかける教えがあり、なかでも親鸞が見たように、「欲生心」として如来の「意欲」が一切衆生に深く呼びかけていることがある。これは一切衆生の根源に、衆生を大悲して止まない如来の願心が、時代を超えてひそかにしかし能動的にはたらき続けているということであろう。その能動性を、時代に生きる人々と共に、常に新たに開示していきたいと願われるのである。

（二〇二二年二月 親鸞仏教センター所長 本多弘之）

[表紙の作家]

浅野竹二

版画家。1900年、京都生まれ。日本画から木版画に転じ、自画自刻自摺の創作版画の手法で全国の名所を描いた風景画で人気を博す。繊細で軽妙な画風から事物の誇張や省略表現を進め、「自由版画」を確立した。独特の哲学と健康なヒューマニズムが交差する独自の世界をつくりあげた。1998年、京都で没した。

[表紙の作品]

「女と鳥と虫と」

(1973年作、自由版画。府中市美術館所蔵)



相合い傘を差しかけるかのように大きな鳥に近づこうとする女性と、大きな鳥の背中から何やら女性に言い返しているかのような小さな鳥。肝心の大きな鳥は泰然自若としてそっぽを向いている。三者の微妙な愛憎関係。そこへなぜか関係のなさそうな虫がぷ〜んと飛んできて……。府中市美術館の主任学芸員・志賀秀孝さんのユーモラスな読み解きである。この作品には、この地球に生きるものたちに対する浅野竹二の鋭い観察眼と愛情が感じられるという。この三者（四者？）の関係やいかに…？画面右端に描かれた上へ登っていく階段が、浅野竹二が夢想したその未来を象徴しているのではないかと、志賀さんは指摘する。

『アンジャリ』 第44号

2024年12月1日発行

発行者 本多弘之（親鸞仏教センター所長）

編集・発行 親鸞仏教センター（真宗大谷派）

〒113-0034 東京都文京区湯島 2-19-11

TEL.03-3814-4900 FAX.03-3814-4901

e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

<https://www.shinran-bc.higashihonganji.or.jp>

制作 さいはて社

デザイン 早川 宏美

お知らせ

- 『アンジャリ』第44号をお届けします。
- 本誌『アンジャリ』の定期購読、ならびに、バックナンバーのお求めとお問い合わせは、電話・FAX・Eメール等で、上記までご連絡ください。

